

トワイライト氏のとある一日

(彼と彼女の食卓)

「そういえばさ」

いつもの食卓で。彼がふと話したのは多少珍しい話題だった。

「なーに？」

「ときどき来る人、いるじゃん。あの人のことどう思う？」

「どれ？」

梟ふくろうにはまだ心当たりがないらしい。彼だつてさつきふいに記憶よみがえが蘇よみがえつたのだから無理もない話だ。それほどに平時へいじは忘れ去さらっている。奇妙にも。

「ほら……なんか背の高い。変な人。来るじゃん。思い出したようにさ」

「だれ？男？女？」

「女の人。俺と同じくらいの背丈せたけの。黒っぽい髪で金色の目とにかく背が高い。なんかすごく変な人いるだろ？綺麗な女の子と一緒にいてさ」

「それは誰？狼むじな？狐きつね？」

「狐……まあ、かけ離れてはいないような気もするけど。なんだかよくわからない。まともな獣けものではないんじゃないかな。人間じゃないのは間違いないけど」

確かに、女狐めぎつねの類たぐいではある。そして穴に棲すんでいるので穴熊ムジナにも似ていないこともない。しかしなんだかよくわからない相手。

「ホーホーにもよくお土産みやげくれてさ。遊んでくれる人いるでしょ？子供連れてうちに遊びに来る女の人いるじゃん、すごく変な人だ

よ。でも綺麗な女の人。俺と同じくらいの身長。手紙を出す。大人」

他にも特徴はあるが、例えば衣服いぶつについてあれこれ言っても梟ふくろうはあまり気に留とめていないだろうと思ひ、わかりやすそうなどころだけ彼が繰り返しているとそのうち梟ふくろうは記憶の中に手応えを見つけたらしい。わざと隙ひまを見ているのかと思える感じに口を開け声を出す。

「ああ、井戸のか？」

その無防備な口元を眺めて、

「そうぞう、その井戸の人」

彼が頷うなずくのに合わせて、梟ふくろうもひよこひよこ首を振った。

「いるいる。井戸の。知ってる知ってる」

揺れる長い髪が食器の中に滑り落ちないよう注意を払い、彼はついでに手を伸ばし白い頬にくつついたスプーンを親指で拭ぬぐいた。それを舐なめて呷くく。

「日頃忘れてるよね。不思議と」

「私思い出しもしなかったよ！なんでだろう！おっかしな話！」

顔中で驚きを素直に表現し、素す頓狂とんきやうな声で叫んでいる梟ふくろうにまた首肯しうこんしつつ、

「あれはなんでなんだらうね。俺もあんまり思い出さないよ。ふつとああ、なんか変な人いたなと思うと色々続けて思い出すんだけどね。この食卓もその人から貰った」

あれだけ強烈なキャラクター、忘れる方が不自然なのが普段はなぜか思い出さない。意識の外そと、手の触ふれない領域りやういに沈んだよ

うにひそやかに息を潜める記憶。醜な輪郭が意味ある像を結ぶのはごく稀なことで、今はたまたま、そのケースに当て嵌まる。

記憶を喚起した切欠がなんだったのかは判然とせぬまま彼は何気なくその話題を口の上らせた。さほどの熱意はなく世間話の一環として。穏やかに暖まった室内の空気に混せても、その温度は変化しない。

話しながら彼がテーブルを人差し指で軽く叩くと、梟も頷く。

「私も貰ったよ、宝物増えちゃってさーやったね！」

得意満面で言われるが、こちらとしては素直に同意できない点もあった。眉根を寄せ、首を捻って、諷める。

「あれもね……ちよつとやりすぎじゃないかな。あんまり人のもの無理矢理奪っちゃ駄目だよ」

「無理矢理とってない。貰った」

「いや結構強引に奪い取ってる。握ったら離さないじゃん」

「貰った！だてくれるって言ったもん井戸のが」

「それは結果的にそう言わされてるだけだよ」

「とってないよ。くれるって言ったもん」

「いやでもさあ。一個二個ならね。俺もなにも言わないよ。けどそうじゃないでしょ。ちよつと見てて気の毒かなって」

「あいつすごいよな！なんか凄いのいっぱい持ってる！もつと取らなきゃ！次々に持つてくるかな？」

「いやだから奪ってるよね」

「とってないよー？」

悪意も矛盾への疑問も微塵もない顔で梟がぼかんと口を開けるのを見ながら彼は小さく溜息をついた。それ以上の抗弁は無駄と悟って諦めて、

「まあ、今思い出したからさ。ちよつと話しておこうかと思つたんだ——ん、それは行儀悪いからやめような」

なんの意味もなくこちらのスプーン皿に指先を突っ込んでばちばちや掻き混ぜている梟の手を引き上げて注意する。何度目かなどとうに忘れたが相手はいつも初耳のような顔をしているしどうでもいいことだった。

彼女はどく吹く風でべとべとの指先を舐めている。固く絞つたきれいな布巾でその指を拭きスプーンを握らせると、今度はそれをまたすぐこちらの皿へと突っ込んできた。何度か掬つて口へ運んでいるのを眺めて、一応教えてみる。

「味は同じだよ？」

梟は飄々とした面持ちで首を傾げた。

「んー、こつちの方が美味いような気がする」

「同じなんだけどね。ちなみになんかどう違うの？」

「んー。なんかよくわかんないけど。あまじよっぱい……？辛い？」

「そのふたつは全然違うのになあ。なんでその間で迷うんだろ」

「あ、具が入ってるのかもしれない。それは違うかな？当たった？」

「入ってないよ。裏漉したから。あと同じ鍋の中身だからね」

「んー、待つて。なにが違うか当てるからね。あ、たぶんね。干したエビかな。入ってない？こつちだけ。だつたらずるい」

「入つてないよ。だからご覧の通り具はないよね。あとそれはホーホーが好きなだけだよ。完全なる当てずっぽうだよ」

「待つてね今当てるからね」

「うん。もし良かったら考えながらこつち食べる？俺そつち食べるからさ」

どう見ても具は入っていない半透明のスープを何度か掬つて見せながら、彼が提案すると梟はきよんとして瞬またたいた。まだスプーンはこちらの皿に入れたまま。

「いいの？」

「いいよ。でも交換は一回限りにしよう。切りが無いからね」

「なんで？」

「切りが無いから」

どうということもなく彼が断言すると梟はすぐ納得した。嬉しそうに皿に手を掛ける。

「そうかあ。うん、じゃあこつち食べよーつと。悪いなチビ！こつちの方が美味しいのにはつかかなやつだなあお前つて」

得意顔でにこにこする手元に皿を押しやって、彼女のものと入れ替える。再開した食事には当然ながらなにひとつ違いを感じ取れなかったが、特に不満もなく顔いて彼は応じた。

「いいよ。あと、鍋にまだ残つてるからお代わりはあるから。欲しいとき言つて」

「エビ入れてもいい？」

「だめ」

「なんでー？」

「残り少ない。それに干しエビの合う味じゃないでしょこれは」

「そうかなあ。エビ美味しいのに」

「街に行つたとき買つてきとくよ」

ふーぶー言う梟を適当に受け流し、何度か匙さしを自分の口へと運んでから、皿の上の波紋を眺めて彼は呟いた。

「で、さ。井戸の人の話なんだけとせ」

忘れていたわけではなかったが話題はすぐに行方不明となる。自分さえ船かじを取れば問題はないので、気にはしていない。梟は完全に忘れていて今思い出したという顔で相槌あいつを打ってくれる。

「あー、井戸のな。あれがどうした？」

「あの人のことどう思う？」

「どうつて？」

「危ないか危なくないか」

「危なくないんじゃない？」

彼女は特に迷いもなくそう言った。そのまま淡い花弁はなびらのような唇に手を当て、少し考え深げな面持ちになる。

「縄張りなつばには干渉しないつて最初に言つたからね。嘘ついてないと思う。別になにもしないつて言つたよ」

過去の己の判断を吟味ぎんみしているのだろう。記憶の糸を手繰るたぐように天井の方へと視線を彷徨さまよわせ、

「それにチビの友達だしね。友達と遊びたいだろ？だから遊びに来てもいいよつて私思つた。まあ悪いことしないなら遊びに来た

らしいと思う。そのとき私も呼べよ！絶対ね！仲間外れにしたらすごく怒る」

「友達ではないんだけどね断じて」

指差してくる彼女の爪を眺めながら彼が静かに訂正を入れると梟は不思議そうにした。

「そうなの？」

「違うからね。仲悪いんだよ俺とあの人。犬猿けんえんの仲なか」

「どっちが犬でどっちが猿？」

ひよいつと無造作に聞かれて、ふと返答に迷う。彼はスプーンから手を離し腕組みした。

「うーん。それどっちがいいんだろう。犬は狼に近くて猿は人間に近いな……俺はどっちを取ればいいのかなあ。でもどっちもそれぞれ下位互換かいごかんっていうか……あれ、なんでこんなことで悩まなきゃいけないんだろ」

梟は可笑おかしそうに笑った。

「蝙蝠こうもりいたらいいのにな。迷わなくて済むのに。ねえ蝙蝠と梟は仲良し？」

話しながら急にとでもいいことを思いついた顔で——彼女はすぐそんな顔をするが——梟が身を乗り出す。彼は目を閉じて、特に笑うでもなくさらりと答える。

「仲がいいね。すくなくとも俺の知ってる梟は、蝙蝠に親切だし、美人だ」

彼女は目を輝かせさらに身を乗り出した。声が大きくなる。

「私の知ってる蝙蝠はね！蝙蝠は……うん、殺したやつもいるけど、それは戦争しかけてきたからね。仕方ない。そいつは嫌いだけど、チビは好きだよ！そしてチビは人間！私のもの！」

「俺も好きだし、俺のものは全部ホーホーのものさ。だいたい、なんでもそうだよ。昔からさ」

「そして私のものはお前のものだよ！つまり私はお前のものってこと。ねえそっち食べてもいい？」

「だめ」

いきなりまた興味を移し、皿を指差して言ってきた彼女をまったく調子を変えないままで一蹴いっしょくする。梟は不満顔になった。

「なんでー？お前のものは私のもの！つまり……」

「でもホーホーのものも俺のものなら、つまりこれとそれは同じだよ。なら変えなくてもいいよね。俺はひよつとしてなにか間違えてるかな？」

彼はふたつの皿を交互に指差しながらゆっくり言う。ごく自然な顔つきのまま。彼女と話すときにははだいたすこし遅目に喋る癖くせがついている。早口だとうまく聞き取れないからだ。梟は首ごと動いてその指を追いながら、

「んー？待ってね考えるからね。んー。それはつまり……そう。合ってる。間違っていないよ。正しいね」

「そうか。安心したよ」

「これ美味い」

「そうか。良かった。まだあるからね」

「うん」

大人しく自分の皿からスープを飲んでいる梟に告げる。

「まあ、大切なのはさ。俺と井戸の人は仲が悪いってこと。そこだけ押さえなくてくれれば十分」

「でも友達だろ？」

「何度でも言うけど違うからね」

「ふーん。そうか。ひよつとして殺した方がいい？」

スプーンを鷲掴みにしたまま、気楽な顔をして梟が言い出すのを聞いて頭の中でその言葉を転がす。首をかるく右に傾ける。判断のつかない疑問も合わせてころころと転がっていった。それを追って視線を横へ向け、わずかに顔をしかめて彼も呟く。

「まあ殺すまでは……どうせ殺しても死なないしなあ」

「死ぬまで殺したら？」

「猫みたいなものかなって。いやもつとたちが悪いような」

「魂たくさん抱えてるたちか？人喰い？」

梟はまだそんなにこの話題に興味を抱いていないようだ。だが彼女は外敵には敏感に反応する。今は呑気そうな顔をして、スプーンをくわえているだけだが。

「いやどうなんだろう。仕組みはよくわからないんだけど、なん可得体が知れなくてさ」

呟きながら、スプーンを置く。反対側に視線を流す。

「——ちなみに、どうにかして殺せると思う？」

普段ならテーブルの下に隠すようなものでも、ふたりだけなら

ば誰に遠慮する必要もない。堂々と机の上を滑らせ向かいまで渡すような感じで、しかしさらっと彼が呟くと、隣に座った梟はこどもなげにそれを受け取り答えた。

「えーわかんない。やってみないと。とにかく潰して潰して潰して潰して潰したらどうなるかな。それで焼く。あと灰は川に流す。どう？」

それは昔聞いた強大化した蝙蝠への対処法だったような気がしたが、他意はないのだろう。単に死にくい相手への処方として思いつきを挙げたらしい梟の顔にふつと視線を戻す。

「それでいけそうな気はする？」

「よくわかんない。だってあいつなんだかよくわかんないんだもの」

「もしあの人が敵だった場合どうする？」

平静なまま、しかし彼がそう突っ込むと、梟はふと興味を惹かれた目つきになった。

「戦争とか決闘とか仕掛けてくるってこと？侵略する？でもしないうって言った。嘘か？」

「例えばの話ね。なにか対処法あるのかな」

「わかんないけど。そうなったら殺すだけだよ。チビどつか行つてね。危ないからさ」

梟はあっさりと言った。頷く彼に問いかけてくる。飴のよう

に立てたスプーンを舂め、飄然とした顔で。

「あいつ危ないの？悪い魔女？」

とこ大人しいしなあ。なにか怪しいところはないか？変なことさ
れない？」

「終始態度は変えずに静かに彼が答え、そしてまた問い返すと梟
は真顔で断言した。

「井戸のはいつも怪しくて変だ」

「そりゃそうなんだけど。まあ、一応大丈夫ってことでいいの
かな……」

「つまりは、また保留か。切り捨てる方法が見つかるのならばそ
れは握っておきたいと思いつつ、彼は別のことを呟いた。

「ん。それもうすこし食べる？」

「ちようだい」

突き出された空の皿を受け取り、席を立てて台所の鍋へと向か
う。暖炉にかけて火を入れるか一瞬迷ったがまだ冷め切つてはい
なかつた。そして梟は猫舌なので、まあこのままが良いかと判断
する。背後へと声をかける。

「どのくらい食べられる？」

「目一杯入れてよ！溢れるくらいね！」

「溢れるとそつちに持つて行くまでに減るから損をするよ。俺が
こぼしちゃうからね。ホーホーに損をさせないように装うけどい
いかな」

「なんということもない声音で彼がそう言うと、梟は背中越しで
もわかるふんぞり返り方の声を上げ笑った。

「いいよ！しょうがないなあチビは下手だな！不器用！へたく

そ！私ならこぼさずに上手に持つてこられるよ！間違いない！で
も許すからちゃんと私が得するようにしてね！」

「うん。ごめんね。今度練習しとくよ」

「得したあ。私偉い。賢い！」

「うん、賢いな」

「エビ入れていい？」

「だめ」

「すかさず梟が言うのを振り向きもせず彼が却下すると、相手は
きよんとしたらしかつた。なぜ断られるのかよくわからないと
いう声で聞いてくる。

「なんで？」

「残り少ない。それに味が合わないから損だよ」

彼女との会話において、同じことを何度も繰り返すことについ
ては、彼は別に損だと思っていない。当たり前のことなので当た
り前に応じているだけだ。話は行きつ戻りつ横道に逸れつつのん
びり進む。不思議と、苛立つたことはない。

梟は意外そうな顔をしていた。どうして損なのかよくわからな
いと思っているらしい。しかし常のこととして、彼が担ごうとし
ている可能性については微塵も疑わないらしく、わかりやすい疑
問符だけ頭の上に浮かべている。

「損なの？」

「損だよ。ホーホーにはなるだけ損をして欲しくないな、俺はさ」

「私も損したくない。でもエビなの？エビなのに損なの？おか

「しな話？」

首を捻ひねっている彼女へと近付きながら、

「エビでも、損な時と得な時があるよ。美味おいしい時に食べた方がいい。見分けるのは難しいと思うかもしれないけど……でもさ、例えば右手と左手はよく似てるけど違う。コインにも裏と表が必ずあるよね。エビの損と得もたぶんそんなものでさ、まあ今は、お勧めはしないかな」

ポケットに入っていた硬貨を一枚、両面を交互に見せながら彼が言うのと、梶はなにやら納得したららしい顔をして頷いた。

「そうかあ。お前は賢いね。私また得をしたかな？」

「すこしね」

「やったね。チビ大好きだよ！」

「うん、俺も好きだよ。はいこれ。スプーン使つてね」

さくつと答えて皿を渡し、また腰掛ける。その際は詰まりすぎている距離をさりげなくすこし開けたのだが、また椅子ごとがたごと寄ってきた梶がにこにこして尋ねてきた。

「ねえチビは私のこと好き？」

スプーンを口に入れるのは聞かれる直前だったため、余計な間を開けることなく落ち着き払って答えることができた。

「今言つたよ」

「よく聞こえなかった！ねえ私のこと好き？もう一回言つてよ！」

「別に何回言つてもいいけど。俺はホーホーが好きさ。当たり前前まの話じゃないかな」

「そうだね！でもどれくらい好き？ねえどれくらい？」

「一番」

矢継ぎ早やつぎばやに問われるのに応じる。目の前で止まっているスプーンの中で小さなさざ波なみが立つ。雫しずくが皿に落ちる。さてこれを口に入れると、飲み込むまでになにか分の悪いことが起きるだろうかと神興みこしを据すえて考える。しかし戻すのも不自然だ。その間顔にはなにも出さなかったし、胸中も平静だった。

梶はいよいよ嬉しそうにして叫んだ。

「大きさで言うところ！どれくらいかな！私はね私の森を全部合わせたよりも、それよりもずっとたくさんお前のことが好きさ！大好きだよ！」

さてどうしよう。

一瞬だけ迷い、まずは掬すくったままだったスープを飲んだ。梶は言いたいことは言ったという顔でわくわくしており、明らかに彼の返答を待っていたので今更多少の間まが開こうがなんだろうが流れは変わらないと判断したからだ。

相手のベースに吞のまれてはいけない。そして吞まれてもいない。冷静に判断しつつ彼はそのままの調子で喋り出した。

「月つてもものすこく遠いところにあるらしいよ。知ってる？」

「知ってた。だって誰も捕まえられない。水に映るのは、あれは影。

飲むと味はするけどね」

「そうだよね。じゃあこのコインをこうやって、平らにして積み重ねるとする。どんどん重ねる」

ポケットから再度出した硬貨を指先につまんだまま、重ねる仕草でちよいちよいと動かす。梶は目を輝かせて頷く。

「うん」

「やがて月に届いたとして」

「うんうん」

「月からもう一回、折り返して積み上げよう。こっちに向けてね。それって、かなりの枚数になるんじゃないかな」

「かなりだな！千ではきかないんじゃない!?」

「たぶんね。万とか億とか、それでも足りないんじゃないかな。えーと。片道二千五百三十三億三千三百三十三万三千三百三十三枚とすると、折り返して五千飛んで六十六億六千六百六十六万六千六百六十七枚、くらいかな」

彼が無意味に指を折って十ずつ数える真似をするのをふんふんと首を振って聞いていた梶だが、最後まで行くとふと思議そうなる顔になって、

「ん？もう一回」

「ものすごくたくさんだね」

「ものすごい感じだったな」

簡単に彼が纏めるとすぐ納めて頷いた。それに頷き返し、これまで通り特に微笑むでもなく続ける。

「まあ、月までこれ積んで、また返ってくればね。それなりに枚数要ると思わない?」

「いると思うよ。すごく思う。それはなんの為に積むの? 難しく

ないか?」

「かなり、難しいと思う。それで何の為かって言うと、面積だかさだか距離だか知らないけど、なにか例えろって言われたんじゃないなかつたかな。それで考えたんだけどさ。まあ、ピンと来ないよね。途方もない話でさ」

不思議そうに問う梶にそう答えると、彼女はすこし考えて、ぱつと顔を輝かせる。

「つまりそれくらい私のことが好きってこと?」

「うん。かなりざくつと例えたけど」

「それは金貨で積むのかな!? それとも銀貨!?」

「はいしゃいだ顔で腕を掴まれ、勢い込んで尋ねられ。それに応じて彼もにっこり笑ってみせた。

「さすが。鋭いね。これを見本にしたけど頭の中では金貨で想像したし、計算してた。銅貨だともう少し厚みあるから……数はすこし減るかな。でも、金貨の方が重いし。値打ちはずつとずつとあるから、兼ね合いで今はそっちの方が適切かなって」

「すごい! 当てた! だって私はわかつたんだよ! お前の考えてることわかつたからね、金貨だと思つたわけ! お前が金貨を月まで積んでるとご想像したんだよ! 私は隣で見てた! そしてそれが当たつてたつてわけ! だってお前の考えること、みんなわかるもの! ねっ、そうだよ!」

梶はいよいよ嬉しそうだ。頬を紅潮させてほとんど立ち上がりんばかりに興奮している。それをやんわりと宥めつつ彼はテーブル

ルの上を指差した。

「うん。そうだよ。知ってるさ。だからさ、まあ落ち着いてさ。まずはそれ、冷めないうちに食べた方がいいんじゃないかな？」

「そうだね！ねえお前は月まで積んだ金貨よりも私が好き？」

スプーンを握り、しかしこちらを向いたままで梟が尋ねてくる。残り少なくなつたスプーンを口に運びつつ、落ち着き払つて彼は答える。

「月まで行つて、折り返すんだよ。だから今ホーホーが考えてるやつ、好きつてことになる」

「すごい！金貨は人間の一番の宝物だろ？それがそんなにいっぱいあるよりも好きなの！どうして!？」

彼女は心底楽しそうだ。似たようなことならば数え切れぬほど繰り返しているが、いつでも新鮮な様子ではしゃぐ。ならば自分は落ち着いているべきだろう。流されてはいない。そう考えながら目を伏せて匙さじの中の水面を眺め、彼は呟く。

「なんでそんなこと聞くんだろう」

「ねえねえ金貨よりも私が好き!？」

「決まりきつたことばかり繰り返すのも、どうなんだろ。陳腐ちんぷになるんじゃないかってさ。なんとか今のご毎回違う例えを考へてるけど……あと、これひよつとすると永遠に終わらないんじゃないかなあ」

常に全力で打ち返してくる卓球相手。いや犬が取つてきたボールを何回でも嬉々として投げてくれる飼主。なにかそんなよう

な。どこかで受け取つてよしよしと終わつてくれればいいのだが、

相手の体力の続く限りこの手の言葉は延々互いの間を往復する羽目になる。馬鹿らしくはないが息は切れる。あとむすむすして座りが悪い。それでも犬が投げられたボールを追いかけて拾うのは、命令されるからではなく、自分がそうしたいからだ。

そして飼主は犬を信じている。一緒に遊ぶのが楽しくてたまらないという顔。梟は期待満面の笑顔でこちらの腕を揺すつた。

「ねえー。なんで言わないの。ねえねえ」

「それ冷めるよ?」

「食べるつて。言ったら食べるよ。ねえなんで。そんなにたたくさんの金貨よりほんとに私の方が好き?どうして?」

「例えば、」

彼女の方は向かず水面を向いたまま、彼が落ち着き払つてなにか話し始めようとしたそのときに。

「私はチビが好きだよ!!大好きさ!!私の宝物たからもの全部合わせたよりも、お前のことが好きだよ!!世界で一番、大好きだからね!!だつて大好きだから!!」

彼女がこちらの顔を覗き込み、大声で言った。紅い瞳あかは暖炉の光を受けてそれこそが宝物ほうもののように輝き、心の底から楽しそうだった。

すこし黙つて、彼はスプーンの最後の一口を飲んだ。やることなくなつてしまった。あくまでも落ち着き払つたまま、空の匙さじを眺めてみる。水面はどこにもなかつた。静かに喋り出す。

「今なにか話そうとしてただけで出合い頭であにぶつかってどっか行った。えーとね」

「うんうん」

「世界中の金貨を掻き集めたとするじゃん」

「うんうん」

「そんなもんより、俺は、ホーホーの方が好きだ」

用意していた台本モノが飛べば、アドリフで話すしかない。断じて内外ないがの平静は崩さないつもりで彼はとりあえず手元に残っていた言葉を使った。

「それはつまり世界で一番つて意味じゃないかな。なぜなら大好きだから。結局これかよ。昔言ってたやつじゃないか。これ恥ずかしいから嫌なんだけど」

「なんでー？わかりやすくいいい！」

梟はにこにこしたが、彼は嫌そうに顔をしかめて口早くちばやに続ける。

「なんか馬鹿みたいじゃんものすごく馬鹿っぽいしかもこれ俺が八歳くらいの時にもすごいドヤ顔で言ってたやつだと思うと心底恥ずかしくてきつい頼むから忘れて」

「なんでー？忘れないよ大好きだからね！だって嬉しかったんだよ!!」

演技ではなく作っていた演技じやうめんにだんだん血のほが上のぼってくるのを感じながら彼は意思の力でそれに抵抗しようと努力する。しかし過去は容赦無く追ってくる。すべて飛び去ったあと最後に残るも

のが希望だと言ったのは誰だ。そんなものは解除不能な時限爆弾と変わらない。

「理屈もなにも通ってないじゃん！必死に足りない頭捻ひねった感とそれでいて結局感情だけ先走ってる感がきつい、無理、ほんど忘られてくれお願いあと父さんに百回も千回も言ったのは俺恨んでるよ未だに」

「だって嬉しかったんだよ!!」

つい伏せていた顔をがばつと上げて、ついでに立ち上がって彼はわめいた。

「事あることに言うから事あることに馬鹿にされたんだよ！人間の世の中には時効つてもものがあつてさ！もういいんじゃないかって思うんだけど！昔からさ思ってたけど更に時間経ったしほんともういいんじゃないかな！俺はそれなりに贖あがなったと思う！恥という名の煙くすぶり続ける炎にみっちり焼かれました！そろそろ許されたい！更新してくれないかなその記憶！」

「やだ」

けろつと即答されて頭を抱える。椅子に座り直してがたがた貧乏ゆすりして、呻うめく。

「うまいこと言ったと思っていた昔の俺を殺しに行きたい」

「だめだよーそんなことしたらだめ！ん、でも、そうなるってチビが大きいのと小さいのとふたりいることになるのかな？やったね！」

「あ、そこで増えると思うんだ。常にプラス思考だよね」

思わず顔を上げて彼が感心すると、梶は不思議そうに首を傾げた。

「プラスなに？」

「褒めたんだよ。ホーホーはすごいねってさ」

「そうさ！私はすごい！」

はしやぐ彼女に彼は平静に尋ねる。

「それももう冷めてないかな。温める？」

「うん」

突き出された皿を受け取り、中身を鍋に戻した。暖炉の上にかけ、掻き混ぜて、温まった中身をまた掬う。まずは梶の皿に。それを手渡した後、彼が自分の皿にも盛り付けているのを見て梶が呑気に声をかけた。

「お前も食べるの？」

頷いて応じる。

「なんかもう残りが中途半端だなんて。片付けちゃおうかと」

彼が席に着くのを眺め、スプーンをくわえた梶は楽しそうに喋っている。優しいげな、面倒見の良い目つきになっている。小さな頃から彼の見慣れた表情。

「食べなよ。たくさん食べた方がいい。お前はやせっぽっちの子だからな」

「身長だけはかなり伸びただけだね」

「食べないもの。肥りようがない。なあ私を齧ってみないか？」

何気なく差し出されたその好意から、彼はそっと目を逸らし

た。湯気の立つスープを飲み込み、静かに答える。

「その話は何度もしたよね。遠慮するってさ」

彼は目を伏せていたが、視界の端に梶が身振りするのは映っている。真つ白い身体が左腕を上げ、その内側、脇の下のすぐ側を右手でさすっている。

「それはもちろん、首はだめさ。危ないものね。この辺どうかな？腕のあたりとかさ。ここならいいよ。お前なら特別。どう？」

気前のいいことを言う梶の声は優しい。その皮膚の柔らかさを思い出し、脈打つ震えを思い出し、その下に流れるものの赤さと味わいを想像した。彼女からはいつも瑞々しく甘い良い匂いがした。目の前の野菜と肉のスープなどより、ずっと。

口にする端から香りも残さず消え失せる酒精よりもずっと、自然に身体を癒してくれるであろうもの。渴きを潤す液体について考える。そこには生命が溶けている。彼女の味についてのとめどない想像は闇夜を思わせた。その白い首筋の持つ弾力が、彼が踏み込むことを避け続けている世界との最後の境界線だった。

意識の隅から鉤を取り出す。理性と言う名の。胸中はざわめくこともなく静かだった。迷いなく邪な思考の流れを断ち切る。

「何度も断ったよ」

考え事は一瞬だったので、梶はなにも気にせず気楽な様子のままだった。もつとも、深刻に悩んでいると打ち明けたときだってそんな態度だったしひよっとすると別に大したことではないのかもしれない。事実がどうであれ、束の間でもそう思えるのは、あ

りがたい。

「せめて兎でも齧れば？生で獲つてきてやるからさあ」

この問題に触れずに生きていくことはきつと難しい。だから時々こうして彼女が気楽につついてくれることは程良いガス抜きになるのかもしれない。ひとりでは煮詰まるばかりだ。まだ大丈夫。「そういうのもいいって昔から言ってるよね。人間は兎とか野鼠とか、生で齧ったりはしないんだよ。食べるなら火を通すし、俺は肉は食べない。無理に詰めたつて胃もたれして吐いちゃうからさ。知ってるよね」

そして彼は意図的に別な話をした。勧められているのは肉ではなく別なものだと理解はしているが、それについての明言は避けた。普段通りだった。

ずらした答えに鼻はまだ納得しきれない声を上げている。

「でもさあ……」

「なんの話してたっけ。なにか考えてたよね。ふたりでさ。覚えてる？ホーホーは賢いし、きつと覚えてると思うんだけど」

「なんか話してたっけ？」

「話してたと思うよ。そういうえば話は変わるけど井戸の蓋を直すうと思つてたんだ。でも寒いから面倒なんだよね」

「井戸の蓋直すの？面白そう。私見てようつと。ん？井戸の？蓋？んん？」

彼の目の先を追って自分も窓の外へと視線を向けてから、鼻はふとなかに気付きかけたような様子をして首を捻り始めた。

露骨すぎる誘導だが、単純な彼女はそんなことには気付かない。大らかなので細かいことは気にしない。むしろ遠回しだと果

てしく目的地からは遠のく一方なので、ときにはこんなこともある。急ぐことない道行きも、たまに手を引いた方が話が早いならその方がいい。夜へと続く昏い小径は静かに解けて、消えていった。その先は迷い込むのではなく自らの意志で踏み込むべき領域。彼は黄昏に留まる。気のいい鼻は、繋いだ手を無理矢理に自分の方へと引つ張りほしない。

「井戸の話してたよね？井戸の、話。そう。井戸の。ん？井戸ののなんの話だっけ？」

彼が窓の外の雪景色をなんとなく眺めているうちに、鼻は失われた筋道を見つけ出したようだった。その言葉に澄まして頷いて、室内へ視線を転じる。血のように赤く雪のように真っ白な彼女へと。

「さすがホーホーだ。よく思い出してくれたね。俺はうっかりして忘れてたよ」

「私はすごい！賢い！お前はうっかり者！しょうがないやつ！」

「うん、賢い。そう、井戸の話をしてたんだ。とりあえずは現状維持か」

勝ち誇る彼女に彼が平静にそう答えていると、ふと鼻が疑問を拾つて首を傾げる。

「げんじょうなに？」

「まあ今まで通りってこと。ん？ひよつとするとわかる時とわか

んない時とある？現状維持は今まで通じてたような気も」

彼もかろく首を捻る。言語は不一致だが、大体の魔物の例に漏れず、梟は翻訳の魔法を使えるので意思の疎通に問題はない。ただし音声言語に限る。

しかし彼女のそれは精度があまりよくないらしく、しばしば聞き漏らしてはこんなふうに戻して返してることがあった。通じやすいのは基本的には日常会話の範囲だが、現状維持、というのはいかにも会議で頻発しそうな言葉ではある。彼女はこう見えて王様であり、領土問題には一家言あるのだ。

彼がゆつくりと発音し直してみると、梟は得心行ったように何度か頷き、べちべちと無邪気に両掌を合わせた。

「ああー、げんじょういじ。現状維持か。ちよつと今わかんなかった。それわかるよ。わかる言葉」

「だよね。で、井戸の怪物への対処か。小夜啼鳥がいなければな。俺ももうすこし色々考えるんだけど」

「小夜啼鳥！」

素つ頓狂な声で叫んで梟は今度こそ立ち上がった。勢いで引つ繰り返りそうになったスプ皿を彼はさつと手を伸ばして守った。そんなことには委細構わぬ風に、梟は目を瞞つて続けた。

「小夜啼鳥だよ！私なんで思い出さなかったのかな？おかしな話だよね！小夜啼鳥いるよ、いる」

「いるね。子連れというのがまたなんというかややこしいよね」
答えながら、座るように促す。神秘的な陶磁器人形のような少

女の姿を思い出ししているのだろう。上の空で椅子に腰掛け直した梟は、

「小夜啼鳥と友達になりたい」

「悪戯をやめればね。もうすこし遊んでくれるんじゃないかな」

「イタズラしてないよ」

「してるよ……」

真顔で即答されて呆れる。相手はなんら気にせず、テーブルの下で足を伸ばして無意味にばたばたさせた。

「私はね、あれは小間使いなんて嘘だと思っ。どこかのお城のお姫様じゃないかって。だってあんなにきれいだろう？魔女に攫われたお姫様なんだよ。それで騙されて井戸の底で働かされてるの。違うかな？」

「うーん。いい線突いているような気もするんだよなあ……」

「だろー？私は賢い！とても鋭い！」

得意げに破顔してから、ふと梟は思い出したように言った。

「ねえなんで余所の人いると変な喋り方するの？なぜ？おかしな話じゃない？」

「俺？変な喋り方してるかな」

スプ皿から顔を上げずに平然と彼が問い返すと、梟は不思議そうに頷いた。

「してるよお。なんかね、変だよ。やたらと笑ったり怒ったりもね。なんか、むやみに悪ぶってないか？変なのって私思う。面白いからいいけどね」

皿を傾け、また少なくなつたスープを掬う。目を閉じて口に運ぶ台間に彼は答える。

「そうかな。そうでもないと思うけど。まあ、仕事してるようなものかも。多少気を遣つて、丁寧に乗ってるのかな」

「丁寧か？」

「丁寧じゃないかな。父さんに似てない？」

「ああ、狼殿な。うん。ちよつとだけ似てるよ。似てる」

梶は納得した声を上げた。彼は澄まして言った。

「父さんに似てるなら間違いないんじゃない？」

梶は朗らかに笑つて、彼の肩を叩く。なんの疑いも憂いもない顔は快かつた。

「そうだね。間違いないね。お前は狼殿にすこし似ている！なぜなら親子だから！それは当たり前のこと！」

「そうだよ。ん。もう食べ終わった？」

「うん。ねえ小夜啼鳥の話してよ！」

「あの子の話？」

問われて彼が聞き返すと、梶は楽しみに首を振つた。

「別な小夜啼鳥でもいい。小夜啼鳥が出てくる話して」

「うーん。じゃあ、考える。皿を洗つてきてからでいいかな」

言いながら立ち上がり、ふたり分の食器を持つて流しへ向かう。その背に向けて梶がご機嫌にはしゃいだ声で急かす。

「いいけど早く！洗いながらでも話せるだろ早く早く！」

彼は素直に微笑んで応じた。いつものように。

「すぐに済むよ。まずは、小夜啼鳥というのは、歌う小鳥なんだけど……」

ぱたり、ぱたりと。頭の中で頁が開く音がする。言葉を先に走らせて、気楽に後を追いかけていく。彼女に話すのがやつぱり一番上手くいく。語りながら、お話を組み立てながら、彼はそんなことを考えている。